

Cure to Care 第 6 . 5 話

與儀 達朗

【登場人物】第6・5話

町田 翼（32）：救急・訪問診療医

鈴木 舞（32）：訪問看護師

村井 正和（50）：訪問診療所院長

五十嵐 隼人（28）：訪問診療所アシスタ

ント

金城 恵（36）：訪問診療所アシスタント

新井 亮（29）：町田の後輩の救急医

高井 玲奈（30）：救命センター看護師

* 台詞名は新井に似ているため、玲奈表記

山崎 香織（55）（50）：居宅ケアマネ

1ジャー

鈴木 健（52）：外科部長・鈴木舞の父

石原 翔（37）：外科医

渡邊 宏明（60）（55）：施設管理者

玉城 和子（78）：居宅患者

宮本 タマ（80）：山崎の担当居宅患者

宮本 綾子（40）：タマの娘

鈴木 真由（50）：鈴木舞の母

新津（60）：訪問診療医

望月（55）：訪問看護師

玉城勉（80）：和子の主人

新堂（55）：学会座長

石渡（40）：退院支援看護師

覚知（50）：居酒屋店主

訪問看護師（30）：鈴木舞の同僚

在宅患者 A（76）：在宅患者

在宅患者 B（78）：在宅患者

在宅患者 C（80）：在宅患者

救急隊員（22）：救急隊員

介護職員（40）：施設の施設職員

ホームヘルパー（22）：宮本タマ担当

【あらすじ】第6・5話

村井が出張中、町田はケアマネの山崎から、患者の紹介を受けるが、不幸にも患者が転倒、介護力の問題から、施設入所となってしまう。軽微な症状であっても執拗に病院受診をさせる施設長渡邊の方針に関して、納得のいかない町田達。当初は渡邊に対して歯切れの悪い山崎であったが、町田をはじめとする在宅チームに自らの過去を話し、渡邊も施設内の急変対応を通じて、自らの考えを改めるのであった。

第6・5話 「責任」

○村井訪問診療所・オフィス（朝）

町田翼（32）が眠そうな顔でオフィ
スに入ってくる。デスクで書類仕事を
している五十嵐隼人（28）がコーヒ
ーを入れて町田の机に置く。

五十嵐「おはようございます」

町田「おはよう、ありがとう」

五十嵐「昨日の赤田さんの往診、お疲れ様で
した」

町田「五十嵐くんもお疲れ様。やっぱ行って
よかったね」

五十嵐「ですね」

院長不在のデスクに目をやる町田。

町田「今日からワンオペか……」

診療所の壁にかかっているホワイトボ
ードに『村井出張中』『金城休み』と
書かれている。

五十嵐「先生と僕で頑張らしましょう」

町田「だな……まあ五十嵐くんがいれば大丈夫だよ」

五十嵐は照れくさそうな表情を浮かべる。

○ホテル・玄関（朝）

『在宅医療学会』という立て看板が設置されている。

○同・ホール（朝）

村井正和（50）が舞台にあがる。

スクリーンにスライドが映し出されたことを確認する。

村井「皆さん、おはようございます。学会でこのような貴重な発表の機会を頂きありがとうございます。私からは在宅医療の未来と課題という題でお話しようと思います」

○村井訪問診療所・オフィス（朝）

玄関のチャイムの音を聞き、玄関にむ

かう五十嵐。

○同・玄関（朝）

五十嵐が扉を開けると、ケアマネの

山崎佳織（55）が立っている。

五十嵐「あ、山崎さん。おはようございます」

山崎「おはよう、五十嵐くん。朝早くに悪い

わね。村井院長いる？」

五十嵐「今日から学会で不在なんです……」

玄関に姿をみせる町田。山崎と目があ

う。

山崎「あら、町田先生」

町田「山崎さん、お世話になってます。先

日はどうも……」

山崎「奢ってもらうのは忘れてないからね」

苦笑いの町田。

山崎「冗談よ。実は新規の方を紹介したくて

ね……」

町田と五十嵐が顔を見合わせ、頷く。

○玉城宅・居間（朝）

机を前に座っている玉城和子（78）、

鈴木舞（32）、町田、五十嵐、山崎。

玉城和子「玉城和子です、よろしくお願ひします」

山崎「和子さん、前少し話していた訪問診療や看護の方達よ」

町田「医師の町田です」

五十嵐「アシスタントの五十嵐と申します」

舞「看護師の鈴木です」

山崎「通院が大変だと思うから、今度からは

お医者をはじめ、家に来てくれるのよ」

玉城「それは本当助かるわ、よろしくね」

町田「何回か圧迫骨折をされていて、生活が

大変と伺っています……」

玉城「山崎さんからも、身寄りもないから施

設はどう？って勧められた時もあるけど、

主人が大切にしてきたこの家でギリギリま

で過ごしていききたいのよね」

○同・仏壇前（朝）

玉城勉（80）の遺影が置かれている。

○同・居間（朝）

玉城「入院したこともあるけど、私の腰のこ
とを気にしてからか、寝る時間が多くてね
∴∴外来も座っている時間が辛いわ」

山崎「病院にはなるべく行きたくないって思
いがあるから、町田先生をはじめよろしく
ね」

鈴木「私たちがいれば、簡単な点滴もできる
ので安心してください」

玉城「助かるわ」

○ホテル・ホール（朝）

村井がマイクを片手に聴衆へ向けて
話している。

村井「今日の、在宅医療はいわゆる病院で行
う治療を担い始めています。今後も拡充し
ていくでしょう」

○患者 A 宅・居間

町田が患者 A（76）に輸血投与を開始している。

村井 N 「在宅輸血」

○患者 B 宅・居間

五十嵐が人工呼吸器をつけている患者 B（78）に話しかけている。

村井 N 「在宅人工呼吸器管理」

○患者 C 宅・居間

舞が患者 C（80）の透析回路のチェックをしている。

村井 N 「在宅腹膜透析」

○ホテル・ホール（朝）

村井「いままで病院でやってきたこれらの管理がまさに今、在宅でできるようになってきました。ただし患者の状態が悪くなって

しまった時、在宅医療には大きな壁があります」

学会座長の新堂（55）がマイクを手取る。

新堂「単身世帯の高齢者は増加し、救急搬送件数は以前、増えている現状ですね……」

村井が新堂を横目に見る。

村井「そうです。ホスピタルアットホームが推進していく中でも、依然として僕らの前に立ち塞がる壁……皆さんも実感されていると思いますが、それは介護力です」

○玉城宅・キッチン

玉城が棚にある鍋を取ろうとして、バランスを崩して、尻餅をついてしまふ。苦悶様の表情を浮かべる。

○駐車場・車内

車内でパソコンを開いている舞。

パソコンの画面には「膵臓がんの予

後・最新治療」のホームページが表示されている。スマホに着信がなる。

○玉城宅・居間

舞が玉城をソファーに横にする。颯爽と現れる山崎。

舞「町田先生もさっき来てくれて、幸い筋肉の問題じゃないかって……。坐薬や飲み薬も使ってみたんですけど……。動けなさそうです」

玉城「これくらい……」

苦悶様の表情で立ちあがろうとするが、激痛で断念する玉城。

山崎「和子さん、無理しないで」

舞「介護サービスでなんとかありませんか？」

山崎「シヨートで預かってくれないか、いくつか頼んだけど……」

舞を見て、首を横に振る山崎。

山崎「和子さん、今の状況では自宅での生活は難しいと思うわ……。一旦短期間でもいい

から入院して……何回も乗り越えてきたけど、自宅でのサービス調整には限界がきてると思う。ごめんなさい」

玉城「……。山崎さんがそう言うなら仕方ないわね……」

涙を浮かべて、仏壇の遺影を見ている

玉城。

玉城「お父さんごめんね……」

○ホテル・ホール

新堂「結局介護力の問題で、施設に移る高齢者も多いですよね」

村井「仰る通りです。在宅医療は施設にも入りますが、施設内治療に対して、介護を提供する施設から一定の理解を得ないといけません。お看取りをしてくれる施設も増えてきました。状態が変化された場合に全ての施設が我々の治療に理解を示してくれるわけではありません」

○あさひ居宅介護支援事業所・詰所

山崎がケアプランの作成をしている。

目の前の電話が鳴り、受話器をとる。

山崎「はい、あさひ居宅介護支援事業所の山崎です」

石渡（40）（声）「お世話になっております。ひなた病院 退院支援看護師の石渡と申します。恐れ入りますがケアマネージャーの山崎香織様でしょうか？」

山崎「ええ。玉城さんの件ですか？」

石渡（声）「そうです。以前お話しされた施設調整の件ですが、リストの中で入れた施設調整の件が見つかりました」

山崎「ありがとうございます。それで施設はどちらに？」

石渡（声）「セーブという施設です。本人からも、知り合いもいるのでよかったです」

山崎「管理者が内田さんのところですね」

石渡「内田さん……ですか？」

山崎「どうかされました？」

石渡 「私がやりとりした方とは違いそうです
ね。確か先月に管理者が変わったみたいで
す。今、資料ファックスしますね」

山崎 「わかりました、ありがとうございます
た」

電話を切る山崎。

○同・印刷機前

印刷された書類から、石渡から送られ
てきた書類を探し出し、目を通す山崎。
書類の中に、『管理者 渡邊宏明』の
名前を見つける。

T 「翌日」

○サービス付き高齢者向け住宅セーブ・玄関
玄関前に立つ町田、舞。

町田 「山崎さん、まだ来ないね。先入っところ
うか？」

舞に視線を向ける町田。

舞が母から送られてきた『お父さんの

主治医は石原先生だって』という文面が表示されたスマホを見つめている。

町田「鈴木？」

舞「あ、ごめん。そうだね」

急いでスマホをしまう舞。

○同・フロア

介護職員（40）に見守られながら、歩いてくる玉城。玄関から入ってくる

町田と舞。

玉城「あら、先生達」

町田と舞が歩み寄ってくる。

鈴木「玉城さん、腰は良くなったみたいですね」

玉城「少し休んだら大丈夫になったわ」

町田「よかったです。施設に入れば色々と身の回りのことは心配なくなると思います。

医学的なことは僕らがサポートしますから」

玉城「なんか最近階段を登ると息切れがするからまた病院行かないか心配……」

町田「あとで超音波の検査とかで調べてみますね」

山崎が玄関から颯爽と駆け寄ってくる。

山崎「ごめんなさい、遅れちゃった」

○同・管理室

施設管理者の渡邊宏明（60）が四人の談笑する姿を窓から見ている。

○同・フロア

町田、舞、山崎、玉城が話している中に、管理室の扉を開けて現れる渡邊。

渡邊と目があう山崎。

山崎「渡邊さん……お久しぶりです」

渡邊「山崎さん、こちらこそお久しぶりです」

町田が山崎の耳元で囁く

町田「お知り合いですか？」

山崎「ええ……昔の私の上司よ」

若干引き攣っている表情の山崎。

舞「そうなんですな」

町田が名刺を取り出し、渡邊の前に歩み寄る。

町田「村井訪問診療所の医師の町田と言います。よろしく願いします」

軽く渡邊に会釈する町田。

舞も渡邊に名刺を手渡す。

舞「訪問看護師の鈴木です。よろしく願いします」

軽く会釈する舞。二人の名刺を眺める

渡邊。

町田「玉城さんも病院嫌いの方ですし、ぜひ施設での医学的な管理は私達にお任せいただければ幸いです」

舞「二十四時間対応なのでご安心ください」

軽く笑みを浮かべる渡邊。

渡邊「……ではよろしく願いします」

ちらっと山崎の方を見る渡邊。

○同・玄関先

診察を終えた町田、鈴木が玄関から外

に出る。その姿を見ている山崎と渡邊。

渡邊 「山崎さん、昔を思い出しますね」

山崎 「渡邊さん、五年前のことは本当に――」

山崎の言葉を遮る渡邊。

渡邊 「山崎さん、これからよろしくお願いし

ますね」

○前田救命センター・玄関前（夕）

鈴木真由（50）が立っている。颯爽

と走ってくる舞。

舞 「ごめん、遅れた」

舞のポケットのスマホに着信がなり、

電話に出る。

舞 「どうした？」

訪問看護師（30）（声） 「舞さん、すいま

せん。やっぱりインフル陽性で……」

舞 「そっか……仕方ないよ。私が代わるね。

気にしないで」

電話を切る舞。

真由 「大丈夫なの？」

舞「今夜ちょっとオンコールしないといけなくなっただけど、大丈夫よ」

玄関の扉が開き、中にはいる真由と舞。

○前田救命センター・外科病棟面談室（夕）

石原翔（37）が電子カルテの画面を

鈴木健（52）、真由、舞に見せなが

ら、病状説明している。

石原「部長、以上が今後の治療のプランになります」

鈴木「わかった、よろしくたのむ」

石原「きついこともあるとは思いますが、乗り越えられるよう全力でサポートします。任せてください」

石原が鈴木から真由、舞の方へ視線を
変える。

石原「家族さんからも何かご質問はありますか？」

鈴木と顔を見合わせる真由。

真由「私は大丈夫です」

舞「質問はないですけど、石原先生には父の
これからの人生も大切に考えてほしいなっ
て思います」

石原「そうですね。治療で人生を伸ばすのが
私の役目ですから」

鈴木の目をみる石原。鈴木が頷く。

何か言いたそうな表情の舞。

石原「ポケットのスマホ、着信入っていきいそう
ですけど大丈夫ですか？」

舞がハツとした表情で、ポケットから
スマホを取り出す。数分前から不在着
信が入っている。

舞「ちよっとすみません……」

面談室の扉を開けて外に出ていく舞。

○同・外科病棟面談室前（夜）

不在着信に折り返す舞。

舞「すみません、電話取れなくて……訪問看
護の鈴木です」

渡邊（声）「ああ、鈴木さんですか。玉城さ

んが熱を出して苦しそうでね……」

鈴木「そうだったんですね、手元に解熱剤はありますか？」

渡邊（声）「さっき、町田先生にも連絡して使用するようにな言われました。別件対応中で終わり次第、向かうとのことですよ」

鈴木「ご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ありません。こちらもすぐに向かいます」

電話を切る鈴木。

○往診車・車内（夜）

運転している五十嵐。助手席で電子カルテを操作している町田。

五十嵐「ワンオペでこうにも往診が重なると流石にきついですね」

町田「まあしょうがないよ。あとどのくらいで着く感じ？」

○同・フロントガラス

反対車線から、一台の救急車が通り過

ぎていく。

○同・車内（夜）

五十嵐「あと10分くらいですかね、確か熱だけって話でしたよね」

町田「確か、渡邊さんからはそのような話だったけど……」

○同・外科病棟廊下（夜）

鈴木と向かい合っている石原。

石原「娘さん、六年前は確か隣町の外科病棟で勤務されていましたよね？」

鈴木「そうなんだよ、気が変わって訪問看護に行くって言い出してな……まあこれからよろしく頼むわ」

鈴木が石原の肩を叩き、去っていく。

鈴木「人生も大切に考えてほしい……か。訪問看護っばいな」

鈴木が去った後に、鼻で笑う石原。

○サービス付き高齢者向け住宅セーブ・玄関

(夜)

町田と五十嵐が玄関先に立つ。颯爽と

走ってくる舞。

舞「電話取れなくてごめんなさい……」

町田「いいよ、気にしないで。幸い状態は、

悪くないみたいだし」

五十嵐「いきますか」

三人が歩いて玄関の扉を開ける。

○同・フロア(夜)

三人がフロア内に入ってくる。三人を

待っている渡邊。

町田「すいません、遅くなってしまって……」

五十嵐「玉城さんは今どこに？」

渡邊「救急搬送してもらいました」

舞「救急搬送？」

驚いた表情の三人。

町田「熱が出ていただけと聞いていました……」

……」

渡邊 「呼吸も早くて、酸素の値も悪かったの
で本人と相談して、そうしました」

町田 「一気に状態が悪くなったってしまった
ということですね……」

舞 「ちなみに搬送先はどちらに？」

渡邊 「前田救命センターだそうです。今夜は
もう大丈夫ですよ、お帰りください」

五十嵐が準備していた薬類をバッグに
戻している。

町田 「すみませんお役に立てなくて。失礼し
ます」

三人が渡邊に一礼して、玄関へ戻って
いく。

渡邊 「本人はすぐに在宅チームが来てくれる
って待っていましたよ……現実には難しいで
すね」

舞の表情が変わり、渡邊の方を振り返
って頭を下げる。

舞 「本当申し訳ありません……私のせいです」

町田 「鈴木……。すぐに駆けつけられず、申

し訳ありません。私が他患者の対応をもう少し迅速にできていたら、結果は変わっていたかもしれません。失礼します」

三人が玄関から外に出ていく。

○往診者・車内（夜）

運転している五十嵐。助手席の町田。

五十嵐「何の病気なんですかね：あんなに急に状態が変わるなんて」

町田「さあな、俺にも想像がつかないよ」

五十嵐「でも、個人的にあの施設長の物言いは好きじゃないです：こっちだって患者の重傷度を天秤にかけて往診しているわけだし、なんか嫌味っぽいつて言うか：：」

町田のスクラブのポケットに入っているスマホに着信が鳴る。新井の表記。

町田「もしもし。どうした？」

○前田救命センター・ステーション（夜）

スマホを耳に当てている新井亮（2

新井「お久しぶりです。先輩最近ガソリン切れっすか？」

○往診者・車内（夜）

スマホを耳に当てている町田。

町田「どう言う意味だよ？」

○前田救命センター・ステーション（夜）

スマホを耳に当てている新井。

新井「いやいや……さっきこっちに玉城さんっていう患者さん来てて……」

○往診者・車内（夜）

町田「玉城さん、呼吸不全で搬送されたって聞いているけど大丈夫？」

町田が心配そうな表情を浮かべる。

○前田救命センター・ステーション（夜）

スマホを耳に当てている新井が笑う。

新井「呼吸不全……先輩、寝ぼけてるんですか？」

新井がちらっと椅子に座っている玉城の姿を見る。高井玲奈（30）が採血後の玉城の腕に、止血用のテープを貼っている。

新井「救急隊の情報見ても、こっち来てからも落ち着いてますよ。風邪っぽいですけどね」

○往診者・車内（夜）

スマホを耳に当てている町田だが、狐に包まれた表情をしている。

町田「どういうこと？」

新井（声）「こっちが聞きたいくらいですよ。訪問診療が来れない、肺炎かもしれないから病院に行った方がいいって……」

町田「俺はそんなこと言ってない」

町田の表情に一筋の怒りがともる。

新井（声）「まあまあ落ち着いてくださいよ。」

先輩らしくないですけど、そんな時もありますよね……って先輩、聞いてます？」

町田がスマホを耳元から外す。スマホを握っている右手が震えている。

○サービス付き高齢者向け住宅セーブ・会議室（夕）

町田、舞、五十嵐、山崎が座っている。杖を挟んで向かい合って座っている渡邊。

町田「施設長、この前の救急搬送の件を本人にどう説明されたのですか？」

渡邊「具合が悪い。往診の目処が立たっていないから、病院に行った方が良いと言いました」

町田「目処が立ってない？ 向かっているとお伝えしましたが、それは本人に伝わっていないんですか？」

渡邊「伝えましたよ。ただいつ来るかはわかりません。酸素の値もいつもより低かったで

すし、呼吸も早かった。肺炎かもしれないからなるべく早く治療を受けた方が良いでしょう。僕の言ってることは間違っていますか？」

五十嵐「状態的には運ぶ必要はなかったんじゃないですか？ 実際病院では結局肺炎じゃないかったですし、何も治療はされてないじゃないですか？」

渡邊「それは結果論でしょう」

舞「もともと病院嫌いだし、なるべく施設でみてあげるべきだったと思います」

渡邊「施設でみる？ あなた達在宅チームは簡単に言いますけど、急変して仮に命を落とすようなことがあれば、誰がそれを背負うと思ってるんですか？」

町田「それは、治療を決断した僕らだと思います」

渡邊「町田先生、綺麗事はやめてください」

町田「綺麗事を言っているつもりはありません」

山崎が息を吸う。

山崎「もうやめにしましょう……」

渡邊が少し胸を押さえて、立ち上がり息を整える。町田が、渡邊の額の冷や汗に気づく。

渡邊「僕はあるので、失礼します」

渡邊はドアを開けて外に出ていく。

○同・玄関先（夕）

町田、五十嵐、舞、山崎が玄関の扉をあけて外に出てくる。

五十嵐「てっきり、山崎さんから援護射撃があると思ってましたよ。にしてもあの施設長感じ悪くないですか？」

舞「なんか患者を意地でも病院に連れて行くうって感じよね」

町田「山崎さん、昔からあんな感じなんですか？」

町田が三人の前を歩いている山崎に視線を向ける。山崎は数秒下を向いて

三人の方を振り返る。

山崎「ねえ、三人にちよっとお願いがあるんだけど……」

五十嵐「お願いですか？」

山崎「いまから軽く飲みにつき合ってくれない？」

町田「急にどうしたんですか？」

山崎「いいじゃん、お姉さんからの頼みよ。」

ほら前の貸しはこれでチャラにしてあげる」

山崎は町田のお尻を叩く。町田は表情を歪める。そっと立ち去ろうとする舞、五十嵐。

山崎「あれ？二人とも私の運転した車に乗ってなかった？」

舞と五十嵐が足を止める。

○居酒屋・テーブル席（夜）

町田、舞、五十嵐、山崎が座って酒を飲んでいる。豪快にジョッキを飲み干して机に置く山崎。

山崎がカウンター奥にいる覚知（5

0）に声をかける。

山崎「覚知さん、生一つお願い」

五十嵐が町田の耳元で囁く。

五十嵐「相変わらず、すごい飲みっぷりです

ね」

町田「だよな」

舞のスマホに母から着信が入る。

舞「ごめん、ちょっと出てくる」

席を立ち上がり、玄関に向かう舞。

山崎「あんた達、全然お酒すすんでないじゃ

ん。五十嵐くんこれ食べないの？」

五十嵐「もらってください」

山崎が五十嵐の手のつけてないお通し

を豪快に食べる。

○同・玄関先（夜）

舞が母親と電話している。

舞「初回の化学療法の日程が決まったんだ：

…いよいよこれからって感じだね」

電話を切る舞。

○同・テーブル席（夜）

舞が戻ってきてきて席に着く。若干不安そう
な表情が気になる町田。

町田「鈴木、大丈夫？」

舞「うん、大丈夫」

鈴木は町田を見て軽く微笑む。軽く酔っ
払っている山崎。

山崎「覚知さん、例のアレ持ってきてくれな
い？」

○同・カウンター

覚知が驚きの表情を見せる。

覚知「保管しているだけで、もう飲めないよ」

○同・テーブル席（夜）

山崎「とりあえずお願い。グラスはひとつで
いいわ」

覚知がボトルとグラスを持ってきて、

机の上に置く。

覚知「お腹壊しても知りませんよ、山崎さん」

山崎がボトルを取って、グラスに注ぐ。

ボトルの名前と日付『渡邊主任、山崎

2020年1月』が町田の目に入る。

町田「山崎さん、これは……」

山崎「あの頃は、渡邊さんとよく飲みに来て

たわ。患者の思いを大切にする憧れの先輩

だった……私がダメにしたのよ」

町田、舞、五十嵐が山崎の発言に驚い

ている。

（回想はじめ 五年前）

○同・テーブル席（夜）

机の上に焼酎の瓶が置かれている。

髪が少し長く服装が柔らかい山崎佳織

（50）、渡邊宏明（55）が酒を飲

んでいる。

渡邊「宮本さんの訪問診療と看護、決まった

って？」

山崎「ええ」

渡邊「在宅側の質とかは大丈夫なの？ 山崎

は医療者の箔に弱いからなあ」

山崎の顔をみて笑う渡邊。

山崎「大丈夫ですよ」

渡邊の顔を見て、笑い返す山崎。

○宮本宅・居間

宮本タマ（80）、訪問診療医の新津（60）、訪問看護師の望月（50）

に対してケアプランの説明をしている

山崎。

山崎N「今思えば、主任の言う通りだった。

当時の私はベテラン、資格とかそういうカ

タログスペックに弱かったわ。そこに医療

の安心感を見出していた」

○宮本宅・ベッド

望月（50）がタマの血圧を測ってい

る。タマの聴診をする新津。後ろから様子を見ている山崎。

山崎 N 「みんなが独居の宮本さんを支えていけると思っていたわ、でも現実には厳しかった……」

○同・居間

咳込んでいるタマ。背中をさすっている山崎。山崎が望月に電話をかけるが繋がらない。渋い表情の山崎だが、望月からの折り返しがあり、少し表情が緩み電話に出る。

山崎 「望月さん……タマさんが咳き込んでみんきてくれませんか？」

望月 「山崎さん、ごめんね。こっちは今人足りなくて……先生が指示でお薬出していたと思うから飲ませてくれない？」

○同・玄関先

タマが足を捻って玄関先で痛そうにし

ている。

○クリニック・院長室

新津が書類仕事を片付け、白衣を羽織りながら、電話している。

新津「山崎さん、うちは外来もやっついて忙しいんだ：：そこは介護サービスの問題じゃないの？」

山崎 N「訪問診療や看護が困ったときに来てくれることはなかった」

○宮本宅・ベッド

ふらつき歩行のタマをホームヘルパー（22）が介助して椅子に座らせる。
なんとか水を飲んでいるタマ。

山崎 N「宮本さん自身も医療者との距離を感じてどんどん弱っていったわ」

○居宅介護支援事業所・主任デスク

山崎が渡邊と話している。

山崎 N 「これじゃいけないって思って主任の渡邊さんとも話して、遠方の家族を巻き込んで、事業所を変えてもらうことにしたの……でも遅かった」

○同・居間

倒れているタマを見つけ、駆け寄るホームヘルパー。タマの足が腫れており、息が荒い。

山崎 N 「寝たきりになりつつあったタマさんはいわゆるエコノミークラス症候群になって病院に搬送されたわ。幸い一命は取り留めたけどね」

○クリニック・会議室

タマの娘の宮本綾子（40）、山崎、渡邊、新津、望月が座っており、話し込んでいる。

綾子 「母は：なんでこんな結果になってしまったのですか？」

山崎 N 「診療側は、私たちが数日前に足のむくみについて報告をあげていたのに関わらず、もちろん往診には来なかったわ」

渡邊が新津、望月と言い争っている。

呆然の表情の山崎。

山崎 N 「そんな報告は聞いてないだの、挙げ句の果てに、私たちの介護サービス調整の不備を指摘した」

○居宅介護支援事業所・主任デスク

引き出しから辞表を出す渡邊。

山崎 N 「診療側のバッグに有力者がいてね：
：私を守った渡邊さんに圧力をかけはじめて、耐えきれなくて職場を辞めることになったの」

（回想終わり）

○同・テーブル席（夜）

町田、五十嵐、舞が神妙な面持ちで

話を聞いている。

山崎「あの時の私が未熟なせいで、渡邊さんを変えてしまった……」

町田がボトルを手に取り眺めているが何かを思いつき、カウンターの覚知の方を見る。

町田「グラス一つもらえますか？」

町田が舞と五十嵐の方を見る。

舞「私も一つ」

五十嵐「僕ももらいます」

覚知がグラスを三つを持ってくる。

町田がボトルから酒を注ぐ。

山崎「どうしたのよ？」

町田「いくら山崎さんでもこのボトルを一人で飲むのは重過ぎます。僕らにも分けてください」

舞と五十嵐もグラスを手に取り、にっこり笑う。

山崎「まったくあんた達……本当あまちゃんなんだから」

山崎がにっこり笑い、四人が乾杯する。

○サービス付き高齢者向け住宅セーブ・個室

町田が玉城に丁寧な診察をしている。

山崎が後ろに立っている。

町田「少し血圧が高めなので、血圧の薬を調整しますね」

玉城「わかりました。先生達は本当忙しいのね……」

町田「この前はすぐに来れなくてすみません。何かあったら今度こそ駆けつけます。一人も欠かすことなく責任もって診るのが僕らの仕事ですから」

玉城「たのみます」

町田が名刺を取り出して、玉城に渡す。

町田「何かあればここに連絡をお願いします。遠慮はいらないですからね」

玉城「ありがとう。言い忘れてて申し訳ないけど、そういうばこが気になって……」

町田「ちょっと診てみますね」

五十嵐に目配せする町田。

五十嵐「玉城さん、ゆっくりで大丈夫ですか
らね」

五十嵐が脱衣の介助をしている

山崎が町田と五十嵐を優しい表情で見
ている。

○同・個室扉

渡邊が町田と五十嵐の診療風景を見て
いる。

○同・管理者デスク

町田が座っている渡邊に声をかける。

町田「施設長。玉城さんの情報共有なんです
が……最近血圧が高めで血圧の薬を調整し
てます。夜間から朝方にかけて息苦しさを
訴えがあれば、教えて欲しいです」

デスクの引き出しが空いており、ニト
ロールスプレーが目に入る町田。

渡邊は町田の視線に気付き、引き出し

を閉める。

渡邊 「何かあれば、連絡はしますよ」

町田が、渡邊に軽く会釈する。

○同・個室（夜）

トイレから出てきた玉城が胸に手をあてる。机の上に視線を向ける。机の上に町田の名刺、スマホが置かれている。

○同・管理者デスク（夜）

渡邊がピッチの電源が入らずイライラしている。管理者デスク前のナイスコールが鳴る。ナイスコールに気づく介護職員。

介護職員 「みてきますね」

○同・個室（夜）

渡邊が玉城の個室の扉を開ける。喘鳴で苦しそうにしている玉城をみて駆け寄る。横で背中をさする介護職員。

渡邊 「玉城さん！」

玉城 「わ、渡邊：：さん。苦しい」

右手に名刺を握りしめている玉城。

渡邊 「こんな状況だと、訪問診療は役に立ちませんよ。玉城さん、救急車を呼んできませんね」

○同・階段（夜）

階段を急いで駆け下りる渡邊。駆け降りた直後に胸の痛みを感じ始める。

○同・管理者デスク前（夜）

管理者デスクの机の上に置いてある子機を目指して、胸の痛みに耐えて、進んでいく渡邊だったが、あと数mのところまで力尽きる。

○同・玄関（夜）

玄関の扉が開く。町田、舞、五十嵐、山崎が入ってくる。

○同・管理者デスク前

渡邊の前に、ニトロールスプレーを
持った町田が現れる。

町田「渡邊さん、これを」

ニトロールスプレーを町田から受け取り使用する渡邊。胸の痛みが緩和した
ことを感じる。

渡邊「助かった……だが玉城さんは先生たちの
手に負える範囲じゃない」

渡邊が机の子機に手をのぼそうとする
が、それを制する町田。

町田「まずは患者を診させてください」

渡邊「なにをするんですか！ 玉城さんがこ
こで亡くなりでもしたら誰が責任を取ると
思っているんですか？」

町田「五年前のことは聞いています……僕ら
も玉城さんの命を預かっているチームの一
員です。決して渡邊さんに背負わすことは
しません」

町田の瞳の奥にある覚悟を感じ取る渡邊。点滴や機材を準備している舞と五十嵐。

舞「先に上にあがってる」

町田「静脈路確保をお願い。五十嵐君は酸素ボンベの管理を頼む」

舞と五十嵐が階段を上がっていく。

誰かと電話している山崎。

山崎「酸素業者もうすぐ着くわ」

頷く町田。渡邊の方を振り返る。

町田「まずは、僕らを信じてください」

町田が山崎に目配せをして、階段を上がっていく。

○同・個室（夜）

町田がエコーを玉城の胸にあてながら舞と五十嵐に指示を出している。舞が静脈路からフロセミドを投与、五十嵐が持続陽圧呼吸療法のためのマスクを玉城の顔に着けている。

○同・個室扉（夜）

町田、舞、五十嵐のチームワーク抜群の処置を見ている山崎と渡邊。

T「翌日」

○同・個室

酸素カニユーレはついているが、穏やかな表情の玉城。町田が聴診している。

町田「玉城さん、昨日は大変でしたけど、なんとか乗り切りましたね」

町田が玉城を見てにっこり笑う。

玉城「町田先生、ありがとう」

○同・個室前廊下

町田が個室の扉を開けて外に出てくる。

山崎と渡邊が立っている。

山崎「玉城さんは？」

町田「あとは飲み薬で大丈夫そうです」

山崎「よかったわ」

町田が二人に会釈して去ろうとする。

渡邊が町田に声をかける。

渡邊「あんな状況で救急車を呼ばなかったのは先生くらいだよ。みんな自分が背負うものの大きさを恐れてね」

町田「病院へ送ることが僕らの責任を果たすことではないと思います。患者さんがここでなるべく過ごしたいと願うなら、その場所をギリギリまで守り抜くのが僕らの責任です」

山崎が町田の横に立つ。

山崎「あの時の先生は、責任を渡邊さんに押し付けて逃げました。でもこの町田先生は違う。救急医として誰よりも死を恐れ、誰よりも生に責任を持つとしている……まだ甘ちゃんだけどね」

山崎が町田のお尻ではなく、背中を

叩く。表情が歪む町田。

二人をみて微笑む渡邊。

T 「数週間後」

○ 同・管理室

誰かと電話している渡邊

渡邊 「入居するにあたって訪問診療を探した

いとのことですね……」

数秒間考えている渡邊。

渡邊 「村井訪問診療所なんてどうでしょう？」

○ 村井訪問診療所・外観

村井が『村井訪問診療所』の看板を見ている。村の字が剥げかかっている。

外に出てきた金城恵（36）が村井に声をかける。

金城 「院長、この看板もずいぶん長いんです

よね」

村井 「そうだね」

横に置いてある黒いペンキ缶に目をやる金城。

金城 「いったん白いペンキで全部塗り直してもいいんじゃないかって、町田先生が言っ

てましたよ」

金城は村井に軽く会釈して、診療所の
玄関に向かっていく。看板を見つめて
いる村井。

（第7話「村井訪問診療所」へ続く）